

## 「グリーン化」論と独創性

**最** 近の日本経済を観て大いに驚かされるのは経済や産業の「グリーン化」である。周知のように日本で地球環境問題を本格的にクローズアップさせたのは「京都会議」である。とはいえそれは当初はせいぜい世論喚起の域を出なかった。ところがこの1~2年で事態はすっかり一変した。問題がそうした段階を超えて経済や産業のあり方にまで波及し始めたからだ。環境問題などはせいぜい市民運動の専売特許じゃないかとタカをくくっていた産業界までもがいまやそれをビジネスチャンスの到来と捉えているし、あまつさえ、自動車産業や電気・電子産業など日本を代表する業界に属する大企業までもがいまや環境問題こそが自社の経営の浮沈に関わる重大事だと言わんばかりである。

かくして経済・産業の「グリーン化」は今や後戻りのできない時代の奔流となったかの観があるが、問題は、それが単に時代の動きに乗り遅れまいとする「キャッチアップ」思想に依然として依拠しているのか、それともそこに何か日本人固有の「独創性」が発揮されているのか—という点にある。日本の産業界は、つい先頃まで—というよりも今なお—「情報化」に血道を上げているが、それは明らかにアメリカ人主導の「ネットワーク・ビジネス」追随の域を出ていない。「グリーン・ビジネス」もまたこの程度のものに終わらせて果たしてよいのであろうか。今度こそ日本人の「独創性」が求められまた試されているのではないだろうか。この点に関して小生はささやかではあるが一つの希望を抱いている。地域産業における「グリーン化」がそれぞれ地域固有の条件の下で試みられているからだ。地域における固有性が日本人の「独創性」に繋がるならば、日本産業の将来にも希望が持てようというものである。 (新潟経営大学教授 蛭名保彦)